（3）世界の人々との「対話」能力を育てるために
：小学校教育に求められるもの

広島大学 教育学部　倉地暁美

本稿では、国際化の進展に対応した「対話」能力を育成するために何をなすべきなのか、小学校教育で考慮されねばならない点は何か、筆者自身が行ってきた異文化間教育の実践研究の知見を元に、子供の発達段階を多少考慮しながら、若干の考察を進めてみたい。

幼児期から低学年児童までの教育: Paleyによるアプローチ

小学校低学年までは、教科書から4技能を学ぶという伝統的な方法に加えて、(1)自由で子供にとって最も身近で自然な自己表現の場を設定し(2)複合的なLanguage arts の教育活動を通じて、(3)自己表現のおもしろさや大切さを学び、(4)言語を媒介としたインタラクションの中で、自己のアイデンティティを確立し、(5)併せて思考力、コミュニケーション能力(広義の言語能力としての)、社会性を発達させるといった方法も重視されるべきであろう。

一つの具体的な例として、M.ColeやC.Cazdenが絶賛したPaley(1979,1981,1986,1988,1990,1992)のstory-telling と act-outによる教授法が挙げられよう。PaleyはNarrativeの機能に着目し、子供のfantacy playやstory-tellingを重視する教育活動を展開してきた。PaleyがChicago大学実験校の教室でdata収集を本格的に開始した1976年から1977年までの1年間、筆者(1986)はPaleyの教室で参与観察を行い、民族誌学的な研究を行ったことがある。Paleyのアプローチは教室に子供達を集めて、必ずいくつかの童話や絵本を読み聞かせ、その後、与えられた素材を元に子供達一人一人に独創的な物語りを創作させたり、数人の子供を指名し、即興で劇遊びの形に創作表現("Act-out")させたりするのである。story-tellingについても、教師は創作の現場に立ち会い、テープ録音したり、書き留めたりして記録されたものが、後日分析の材料ともなる。ストーリーは、創作劇同様、必ずクラス全体の前で語る機会が与えられる。子供達は子供達相互の、あるいは教師とのインタラクションの中で、お話しを創ったり、fantacy playの場で自己表現をしながら、成長発達を遂げていくのである。

Paleyの実践的な教育活動は決して、子供達の活動を放置することによって偶発的な創造性の発動を待つというものではない。それならば、普通の教室や家庭や公園の遊び場で行われているままごと遊びやごっこ遊びの域を脱し得ないことになる。VigotskyとPiagetの心理学理論に触発されたというPaleyのアプローチは、子供の創造的な活動のプロセスに必ず自らが立ち合い、教師から個々の発達に応じた言語的な働きかけを積極的に行う。子供が明確に自己表現をし、それが他の子供達にも確実に伝達されるまで教師が言葉を補ったり、あるいは次々と的確な質問を投げかけながら、一人一人の子供の表現意図や表現内容の意味づけ、関係づけを行うところにその大きな特徴がある。子供たちは、Paleyの質問や他の子供達の反応に動機づけられ、創作活動に自己表現のおもしろさを見いだし、教室での自己の所在をより確かなものにしていくのである。

Paleyの教育実践は80年代半ば頃から、アメリカ教育界に一石を投じるものとなったが、その一方で、恐らくこのような授業は、シカゴ大学実験校という特別な教育環境とPaleyという非凡な言語能力と傑出した才能をもった教師という2つの条件が整わなければ、容易に再現できない「芸術」であると評する向きも少なくない。しかし、低学年の児童のコミュニケーション教育を考えるとき、Paleyの教育実践から、我々が学ぶべき点はいくつかあると

思われる。

第1点は子供たち一人一人が躍如として、言語表現に創造的な力を充分に発揮できるような教育活動を工夫するということである。debateや議論など、上手下手や、勝ち負けを争うものや、論理的な表現能力だけに着目するのではなく、創造的な表現活動を触発するような教育活動を展開することも肝要である。

第2点はNarrativeは言語発達だけではなく、子供のさまざまな発達課題の促進に関わる重要な機能であり、注目に値する。

第3点は、表現意図を明確に相手に伝達する能力は、教師と子供の力動的な相互作用の中で育てていくことが重要である。教師は子供の表現活動の中に積極的に参加し、子供達の自己表現活動を積極的に援助したり、表現意図や内容をより明確なものにするために、さまざまな質問を投げかけたり、言葉を補ったりしながら、表現されようとするものの本質を的確に把握し、他の子供達にもそれが理解できるように必要に応じて通訳する、通訳者としての役割を演じることも必要である。

高学年児童への教育:「対話」能力は語学教育だけの課題か

学年が進むにつれて、子供のfantasy playは激減するが、Narrativeの機能*1を活用した違った形の教育活動を展開することによって、子供たちの自己表現活動を動機づけることができるはずである。その一つの手法がJournalを媒介とした教育活動である。Journal-writingの手法は近年アメリカの小学校の国語教育の中にも積極的に取り入れられている(Staton, et. al. 1989、)。journalはさまざまな機能を有し、運用の仕方によって多様な教育的用途に活用され得る手法であり(倉地 1995)、日本の小学校の教育現場への取り入れを検討してみるだけの価値はあるだろう。StatonらのDialogue journalは従来の国語教育における教育指導の比重が往々にして言語習得の側面に、偏りがちであるという点を考慮し、発達の諸側面からその有効性を論じようと試みている点で評価されよう。

言語(国語/外国語)教育が発達の諸課題を一身に担うという積極的な意気込みは大いに評価されるものだが、その反面、果たしてそれが望ましい形なのか、語学教師に何もかもが担えるようなトレーニングが施されているのかどうか、国語教育の中だけで全ての課題を達成するだけの時間的なゆとりがあるのか等様々な疑問も残る。言語は意思疎通の手段として、また思考そのものや、思考力の発達に必要不可欠であり、(L1であれL2であれ)言語習得の重要性は否定できない。また、言葉習得によって、望むと望まざるとに係わらず、言語と表裏一体である文化を同時的に取り込まざるを得ないということも事実である。従って言語教育の諸課題が、諸領域の教育課題と複雑に関わっていることも確かである。しかし、だからといってL1の習得=全人的な成長発達ということにはならないし、L2の習得=文化的相互理解能力の獲得とする見方には大きな飛躍があると言わねばなるまい。

例えば、近年、様々な教育機関では、英語などの外国語教育を、異文化理解のための教育や異文化間コミュニケーションの教育と称して実施するのが、当たり前のような風潮になっている。それは、英語(欧米語など覇権国の言語)による意思伝達能力を獲得すること=異文化理解の能力あるいは世界との対話能力であるという発想に基づくものであり、その背後に、英語(あるいは欧米語)こそが世界の共通語であり、英語(欧米語)話者の中でもとりわけ

アングロ・サクソン(白人)によるコミュニケーション・ストラテジーが絶対的であるという欧米中心主義的なイデオロギーが在ることは打ち消し難い。アメリカで発展した異文化コミュニケーションという学問も、多分にそうしたイデオロギーの色に染められながら構築されてきたものであることは否めない。確かに欧米が保持してきた政治・経済・学問的な力が欧米語をして国際語の地位に君臨せしめた事も事実であるが、英米語(欧米語)自体に、世界の人々との「対話」を可能にできる特別な言語特性があるわけではない。それどころか、「直裁で論理的で、説得力がある」と言われる英語のコミュニケーション・ストラテジーをもってしても、現実には一国内のコミュニケーションすら満足に進められるわけではない。英語話者の白人をマジョリティとして成っているアメリカが、A.シュレジンガー (1992)をして「人種、民族差別の相互隔離(segrigation)が進行し、人種民族集団による「アメリカの分裂」という事態さえ生じている」と発言せしめるような状況を呈していることを見ても、それは自明であろう。英語(欧米語)の習得をもって、多文化間コミュニケーション能力が獲得されるという発想には、この一点だけから見ても、自ずから限界がある。また国際化の進展に対応して我々が覇権を競うのではなく、共生の課題を追求するつもりならば、これからの教育が真に希求すべきは、「異なるものが互いに意見を闘わせ、一致を要求する対話能力」(野家 1993)ではなく共生(conviviality)(井上他 1992)を可能にする「文化を越えた対話」(intercultural dialogue) (倉地 1992)の能力であろう。

国際理解、協力は畢竟、文化、異文化という枠を越えたところの人間理解に帰するものである。筆者はこれまで就学前児童や成人の多文化間の相互理解の問題にとりくんできたが、大人の場合も子供においても、文化を越えた対話能力には言語習得プラスαの能力が必要であり、実はそのプラスαが異文化コミュニケーションにおいて極めて重要なファクターであることを強く認識せざるを得ない(倉地 1986、1992)。そのプラスαとはまず相手から真に理解される存在になるために、(他者を魅了し、他者が理解し、且つ信頼しようと努めるに値する人間として)豊かな個性(知性と感性)、そして自らを堂々とできる率直さと、知的、情緒的、精神的陶冶に裏付けられた自信、さらに精一杯自らの命を生きようとして止まない強い意志の力と行動力を育てなければならない。一方、他者を理解し得る存在となるためには、寛容さや豊かな感受性、好奇心、自分の中にある偏見や先入観を排除しようという意欲や行動力、自文化中心的な発想への気づき、発想の柔軟性、愛他心が不可欠である。

換言すれば、αは、知的、情緒的、行動的な能力の総和であるといえよう。こういった意味からも、共生を可能にするための会話ができる能力をもった人材を育てることは本来学校、家庭、社会全体が取り組むべき大きな教育的課題であり、決して言語学習に付随して、あるいは異文化コミュニケーションで開発されたゲームなどによって一朝一夕に習得されるような類いのものではないはずである。筆者は、言語教育がコミュニケーション能力の育成を目標に掲げることを否定するつもりはない。ただ言語教育がその役割を一手に担うとすれば、当然、プラスαの部分の教育をどうするかという問題も同時に引き受けなければなるまい。さらにいえば、プラスαは単に言語教育の場だけではなく、子供の教育に関与をする者があらゆる機会を通して応分の責任を引き受け、取り組まなければならない大きな課題に違いない。昨今、小学校においても英語をL2教育として取り入れようという意見が持ち上がっているという。外国語学習のメリットについての議論も大切だろうが、それとは別に、国際化の進展する時代を生きる子供達の中に育まなければならない「対話」の能力とはなにかを

もっと広く、深くいろいろな角度から議論し、それに対する抜本的な問題解決の方途も併せて検討されるべきであろう。世界に通用する対話能力の開発は単に教科の壁を取り払うことや、教師の再教育といったレベルでは済まされないような大きな教育改革を必要とするほどの壮大な課題かもしれない。しかし、課題が大きすぎるからといって、茫然と手をこまねいているだけでは、欧米に対抗する手段としての小手先のコミュニケーション方略は獲得されても、共生に繋がる世界の人々との「対話」能力は育つべくもないのではないだろうか。

*1 Janet(1955)が語りを身体と社会と時間をつなぎ合わせ、一つの人格を組み立てる能動的な言語行為として注目して以来、様々な領域において、特に近年narrativeを鍵概念に据えた議論が盛んに行われていることは周知の通りである。、

参考文献

井上達夫、名和田是彦、桂木隆夫 1992『共生への冒険』毎日新聞社

倉地曉美(冨田明希)1986「幼児期における国際理解と協力、平和のための教育をどうすすめるか:ある就学前児童の異文化適応の過程に学ぶもの」『国際理解』18、28-47

倉地曉美 1992『対話からの異文化理解』勁草書房

倉地曉美 1995「異文化間教育カウンセリングへの提言:カウンセリングと異文化間教育の接点を求めて」『留学交流』7、No.9、27-29

シュレジンガー,A.1992「アメリカの分裂:多元文化社会についての所見」岩波書店

野家啓一 1993『無根拠からの出発』勁草書房

Paley,V.1979 White Teacher.Cambridge: Harvard University Press.

Paley,V.1981 Wally's Stories: Conversations in the Kindergarten.Cambridge: Harvard University Press.

Paley,V.1986 Boys & Girls: Superheroes in the Doll Corner.Chicago: University of Chicago Press

Paley,V.1986 Mollie is Three: Growing up in School.Chicago: University of Chicago Press.

P v,V.1988 Bad Guys Don't Have Birthdays: Fantasy Play at Four.Chicago: University of Chicago Press.

Paley,V.1990 The Boy Who Would be a Helicopter: The Uses of Storytelling in the Classroom. Cambridge: Harvard University Press.

Paley,V.1992 You Can't Say You Can't Play. Cambridge: Harvard University Press.

Peyton,J.& Staton,J.1993 Dialogue Journals in the Multilingual Classroom :Building Language Fluency and Writing Skills Through Written Interaction. Norwood,N.J.:Ablex Publishing Co.

Staton,J.,Shuy,R.,Peyton,J.& Reed,L.1988 Dialogue Journal Communication:Classroom,linguistic,social and cognitive views.Norwood,N.J.:Ablex Publishing Co.